

明治の最速スプリンター

桐生祥秀、ケンブリッジ飛鳥といったスプリンターが、100メートル走の公認記録をいつ9秒台にもっていくか。各種の陸上競技大会では、この種の話題で持ちきりだ。素人考えでは、100メートルを10秒で走るというのは、10メートルを1秒で走るわけだから、まさに飛ぶといってもいいことではないかと思う。

もう30年ほど前になるが、こんなことを思いつつ、100メートル走の歴代日本記録を持つ人たちを調べたことがある。日本陸上競技連盟(日本陸連)の公認記録は明治44(1911)年から始まっていて、その第1号は三島弥彦(東京帝大)の12秒6、それから私が関心を持った当時、昭和60(85)年ごろには、東京農大二高の不破弘樹の10秒34までタイムは縮まっている(飯島秀雄も1968年のメキシコ五輪で同じ記録を出しているが、当時は公認記録として扱われなかった電気計時によるものだった)。この間の約75年に、日本記録は、高木正征、吉岡隆徳、飯島、清水禎宏らが、繰り返し塗り替えてきた。

私はまったくのスポーツ嫌い。しかし100メートルを走るスプリンターの体力、知力、それに走っているときの心理などはどうなっているのだろうと思って、高木(大正時代の名スプリンターで、旧制暁星中、同山形高時代に日本記録を出している。三笠宮妃の百合子さまのいとこ)、吉岡(東京文理科大=現筑波大=時代からの選手で、昭和初期には“暁の超特急”と呼ばれた)らを含めて、多くの元スプリンターに話を聞いた。

晩年の吉岡は療養の身だった。東京・虎の門病院の面会室で、「あなたはなぜ100メートルを走り続けたのか」と尋ねると、「えっ、そんなこと今まで聞かれたことはなかった」と考え込んだ。後日電話があり、「あの後考えたよ。つまり走るのが好きだったんだね。もう私も長くはないけれど、いい質問をしてくれてありがとう」と言われて、私も心が和らいた。

大正、昭和のスプリンターたちが伝説のように語る人物がいた。東京帝大の藤井実である。藤井は明治35(02)年の東京帝大運動会(当時の同大学最大のイベント)で、10秒24の記録を出したというのだ。まだ日本陸連も設立されていないから、公認記録のリストには入っていない。

この10秒24は世界を驚かせた。第2回オリンピック(00年、パリ)の2年後の記録だが、この五輪では、アメリカのジャービスの優勝記録が11秒0だったからだ。藤井の方が、はるかに速い。特にイギリス、アメリカでは「東洋の小国にそんな記録を出せ

る者がいるはずがない。ストップウォッチだってまだできたばかりで、日本にそんな技術があるのかね」と冷笑気味だった。しかしイギリス世論が一変する。

東京帝大運動会の発案者で、この大学に陸上競技を持ち込んだのが、明治8(1875)年に来日して教授を務めていたW・ストレンジというイギリス人だったからだ。そのストレンジが認めた記録である。しかもストップウォッチを使わずに、理学部教授の田中館愛橘が考案した電気計測機(コースの横に電線を通してピストルと結んだもので、極めて正確な計測機ゆえ秒以下の数字まで計測できた)での測定だったのである。国際世論は「フジイ」の名を瞬く間に覚えていった。

イギリスの競走馬にミノルの名が付くのはこのときからである。

藤井は大卒後、外交官になった。国際社会では有名で、パーティーではいつも注目された。吉田茂と同級生でもあった。在フランス大使館などヨーロッパでの駐在を経て、昭和3(1928)年には外務省を離れている。国際社会では有名な外交官だった。陸軍の軍事外交に怒りを示しての辞任であった。昭和13(38)年に日英関係が陰悪になると、その改善のために外相に徴せられたが、軍部にこの人事は潰された。しかし藤井は日英関係打開のために、英国大使館側との接触を続けている。昭和16(41)年12月8日の開戦の日、藤井は英国大使のクレイギーから、「あなたと私は友人です。あなたのスポーツマンシップを私たちは忘れない」との伝言を受けている。

藤井は自らの記録を誇ることはなかった。「日本人選手は私に続いてさらに記録を伸ばしていこう」と言い続けた。公認記録第1号の三島は、先輩の藤井に続けと猛練習したという。藤井の記録は本当だったのか、という問いは常にささやかれてきた。田中館教授の電気計時が誤りだったのではないか、との声も確かに大きい。

しかし高木も吉岡も、そうした詮索をしない。失礼にあたるというのだ。吉岡は「藤井さんの記録は我々の目標だった」と言い、高木は「偉大なスプリンターだと思っています」と話していた。

イギリスでは陸上競技のオールドファンに、今も、藤井は「世界で最も速かったスプリンター」だったと評する声がある。吉田茂も、「お前は世界一だ」と老いてもそのレースを思い出していたという。